

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 20 日現在

機関番号：34416

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2015

課題番号：24720330

研究課題名(和文)ユーラシア史的視点に基づく唐代仏教史の再構築

研究課題名(英文)Reconstructing the history of Tang Buddhism from the perspective of Eurasian history

研究代表者

中田 美絵 (Nakata, Mie)

関西大学・東西学術研究所・非常勤研究員

研究者番号：00582842

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究課題は、唐代仏教史をユーラシア史的な文脈のなかに位置づけることを目指すものである。まず、国家事業として実施された経典翻訳などの仏教事業に着目し、それらの事業を実施した集団の人的構成の特徴を整理した。特に、外来人については、彼らの来唐から仏教事業に参加するまでの経緯を明らかにした。そして、これらの仏教事業とユーラシア情勢などの現実的な諸問題との関連性を解明した。また、唐代中国で刷新された仏教は、唐滅亡後のユーラシア東部の多極化のなかで、各地域の王権に如何に受容されるのかを、沙陀の建てた後唐を例に取り上げて考察した。

研究成果の概要(英文)：The aim of the present study was to situate the history of Buddhism in the Tang dynasty in the context of Eurasian history. To achieve this, I first focused on national Buddhist projects and described the characteristics of the personnel that constituted the groups responsible for operation of the projects. I especially clarified the origins of the foreigners who were members of these groups, including details on when they arrived to Tang and their participation in the projects. Subsequently, I elucidated the relevance of these Buddhism projects to contemporary issues such as Eurasian affairs. Finally, by presenting an example from the Later Tang dynasty, which was founded by the nomadic Shatuo, I examined how the reformed style of Buddhism present in Tang China was received among regional sovereignties in the multipolarized eastern Eurasia after the fall of the Tang dynasty.

研究分野：東洋史

キーワード：唐代 ユーラシア 仏教 ソグド人

1. 研究開始当初の背景

仏教は中国に伝来した後も、中国の歴代王朝と様々な形の関係を結び、インド・中央アジアの仏教とも互いに交渉しつつ、幾度も装いを新たに、変化しながら浸透した。とくに唐代に、仏教は都の長安を中心に隆盛し、さらに周辺地域に大きな影響を与えた。では、この唐朝下での仏教は、どのような社会背景の下で、どういった集団によって担われ、唐仏教はその理論や様式を完成させたのか。このような関心に基つき、仏教にかかわる諸事象を、教義面からではなく、政治・軍事・経済などの諸側面とからめ、総合的に考察する研究を進めてきた。

2. 研究の目的

唐代中国において、仏典翻訳、儀礼、寺院建立などを通じ独自の中国仏教が形成された。その形成には、天竺や中国だけが関わるのではなく、ソグド人やバクトリア人などのパミール以西より入唐した集団や、ユーラシアの政治・軍事情勢も深くかかわっているとみられる。そして、そうして形成された仏教は唐朝の政治・軍事・経済・文化などの諸分野で大きな役割を担ったと考えられる。さらに、唐滅亡後は、日本を含むユーラシア東部の諸王権にいかなる影響を与えたのか。以上より、本研究では、編纂史料の調査・整理・分析などの基本的な作業に加え、

近年、陸続と発見される西安・洛陽出土の墓誌や経幢をはじめとする石刻史料を利用し、仏教僧侶や中央ユーラシア出身者の多方面にわたる活動実態の解明

上記の視点による出土文書中の仏教関連資料の調査、
の両作業を通じ、唐における独自の仏教形成と展開の歴史を、総合的かつユーラシア史的視野で再構築することを目指す。

3. 研究の方法

本研究では、唐代仏教史の展開をユーラシア史の中に位置づけるために、次の3点に重点を置きながら研究を進めた。

(1)唐代仏教史を「仏教史」という固定化された分野史のなかで扱うのではなく、政治・経済・軍事等の現実世界の動向とからめて仏教が果たした役割を検討する。

(2)唐という一王朝の枠組みを超えて広くユーラシア的なマクロな視野で捉えなおす。唐代の動向は、いまやユーラシア全体の歴史の中に組み込んで検証することが必須である。唐代仏教(特に長安・洛陽)の動向についても同様である。ユーラシア規模の政治・軍事情勢と仏教との関係や、ソグド人僧侶やそれと結びつくソグド人・バクトリア人たちの活動に注目する。

(3)唐仏教が、日本やユーラシア東部地域の

諸政権や社会にどのような影響を及ぼしたのかを解明する。その際、唐以降中国内地にとどまらず各地域に受容された五臺山文殊信仰が一つのモデルとなる。そこで、本研究では、唐朝によって推進された五臺山文殊信仰に着目し、唐滅亡後の周辺地域における信仰の受容形態を探る。

4. 研究成果

研究期間を通じ、基礎作業として、編纂史料の調査を通じて得られた関連する諸情報の整理や分析に加え、海外では、中国各地の博物館等に所蔵される唐代の石刻史料や、大英図書館に所蔵される唐~五代期の敦煌文書中の仏典奥書をはじめとする仏教関連の資料を調査し、整理をすすめた。具体的な研究成果は以下の通りである。

まず、唐朝の仏教事業(特に長安・洛陽を中心とする)を主導した僧侶やそれを支援した政治勢力の人的なつながりを探るために、主に唐代の長安・洛陽で実施された翻訳事業に着目し、それらに参加した人々の特徴を整理した。特に外国出身者を重点的に調べたところ、在家・出家共に、天竺出身者以外に、ソグド、トカラ、カシミール、罽賓出身者の関与がみられた。彼らは、唐前半期は、主に宮中の皇后や公主をはじめとする女性たちと、後半期は、それにかわって台頭した宦官と結びついて活動していることを確認した。そして、仏典翻訳事業や法会は、唐内地の政治情勢や唐を取り囲む国際情勢にも密接に関わっていることを確認した。

また、外国人仏教僧のなかには、最新の仏典や仏教思想を唐にもたらすものだけでなく、唐皇帝の勅命を受けて外交活動にかかわるなど、政治的な活動を繰り広げるものも確認できた。彼らは、勢力を伸長するイスラームや吐蕃の圧迫を恐れ、新天地となった唐において様々な仏教活動を展開し、その結果、唐仏教にも大きな影響を与えた。すなわち、唐の仏教は、ユーラシアの政治情勢と密接に関わりながら展開していたといえる。

次に、世俗権力の強い影響下にあった唐仏教が、唐の統治理念上の問題や、唐を取り巻く国際情勢など現実的な諸問題と如何にかかわりをもちながら展開していったのかを考察した。

中国では、中国を中心とする中華思想が存在するが、これに対し仏教側は天竺を中心とし、中国を辺土とみなす相容れない世界観を持っており、中華王朝側と仏教側の対立は避けられなかった。ところが、唐代になると、仏教側の認識に変化がみられ、辺土意識は薄れていく。それは、唐代に五臺山のような中国独自の仏教聖地を中国内地に有するようになったことと無関係ではなかった。五臺山には、周辺諸国からだけでなく、仏法の中心地である天竺からも巡礼者がやって来るよ

うになった。つまり中国は、漢訳仏典を通じて教義や思想を中国周辺に発信するだけでなく、仏教聖地を有し、中国内外の人々を引きつける仏教の中心地の一つになったといえる。

こうした唐仏教の隆盛は、唐内外の複雑な政治情勢が関わっていた。八世紀後半の例でいえば、このころ、吐蕃やウイグルなどの周辺国家の勢力伸長により唐は圧迫され、さらに内地の度重なる反乱により皇帝の権威も失墜していった。そうした状況のなか、唐の中央政界でも勢力図に変化がみられ、宦官が新たに台頭し、彼らが中心となって長安における仏教活動を推進した。宦官は、非漢族の人々を積極的に取り込み、自らの勢力拡大をはかるとともに、国際情勢上の諸問題を打破するために仏教を積極的に利用し、仏教で唐皇帝を頂点とする中華思想を主張し、唐内外の秩序再編を目指した。

以上をふまえ、九世紀半ばの宗教弾圧である会昌の廃仏が実施された背景について検討した。宦官・禁軍・仏教勢力は、皇帝を頂点とする仏教による中華統合を目指したが、儒家官僚からすれば、彼らは外来の教えである仏教を奉じた人々であること、また、宦官は儒教の観念に背いた存在であり、非漢族も“華”の対極として排除される存在でしかなかった。つまり、この唐後半期における唐仏教とその推進勢力の動向は、儒家官僚らの反発を引き起こし、最終的に廃仏という反動的エネルギーを生み出す一つの要因になったとみられる。

最後に、唐滅亡後の唐仏教の影響力について検討した。唐代中国で刷新された仏教は、唐滅亡後のユーラシア東部の多極化のなかで、各地域に受容され、独自の様式をとともいつつ浸透していった。とりわけ、唐代中国で隆盛した五臺山信仰は、唐滅亡後、遼・西夏・敦煌・日本などの各地域に受容され、擬似五臺山（小五臺山、五臺山寺など）が創出されたことが示すように、唐仏教の広がりを受容・展開の歴史を知る上で好事例である。そこで、唐滅亡後のユーラシア東部の各地域における五臺山受容のあり方を探るために、本研究では、沙陀が建てた五代後唐を例にとりあげ考察を行った。

五臺山は唐皇帝の多くが熱心に信仰しており、唐朝と密接に結びついた仏教聖地として中国に定着していた。しかし、唐朝の勢力が減退し、沙陀が五臺山を含む代北地域で独立勢力として台頭すると、唐朝にかわって彼らが新たに五臺山との結びつきを強めていたことが確認された。また、遊牧民であった沙陀は、皇帝として即位するにあたり、自らが唐の後継者であることを主張した。その際、様々な瑞祥の発見を巧みに利用し、沙陀による唐の中興を正当化していたことが確認された。注目すべきは、その際に、唐の象徴的な存在となっていた五臺山も重要な役割を

担ったことである。沙陀の李存勖が唐皇帝として即位する年の重要な局面において、五臺山の僧侶は山中で皇帝位の象徴である鼎を発見し献上した。鼎発見は、李存勖こそが、有徳の聖王とする天意であり、そのことが五臺山を介して示されたことを意味するものであった。後唐建国時の五臺山は、唐を象徴するものであるとともに、天命思想的な要素が加わり、皇帝即位の正統化の上で重要な役割を果たす聖地としても機能していたことがうかがえる。いっぽうの五臺山僧侶の側も、唐滅亡後の新たなパトロンを確保するために、五臺山のもつ唐という象徴的機能を前面に出し、皇帝即位のために積極的に協力したとみられる。以上より、沙陀政権(後唐)のケースでいえば、五臺山は、唐の象徴として機能し、彼らが中華地域を正当な立場で支配する上で、欠くことができない存在であったといえる。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 2 件)

中田美絵、八世紀における唐朝と仏教、日本史研究、査読無、615、2013、79 - 102.

中田美絵、唐代中国仏教的転換、唐研究、査読有、18、2012、333 - 355.

〔学会発表〕(計 6 件)

中田美絵、唐代訳経僧的活動和中亜地区、第二屆絲綢之路國際學術研討會「粟特人在中国：考古發現与出土文献的新印証」、2014年8月14日、銀川(中国).

中田美絵、八世紀後半期的唐朝和佛教-特别是從國際形勢的關係上-、佛教史工作坊：台湾大學歷史系・文學院「跨國界的文化傳釋計畫」、2013年11月22日、台北(台湾).

中田美絵、沙陀政権と仏教 後唐建国までを中心に、関西大学東西学術研究所・東アジア宗教儀礼研究班例会、2013年7月29日、関西大学(大阪)

中田美絵、八世紀における唐朝と仏教、日本史研究会例会：古代における国際秩序形成と仏教、2013年2月24日、キャンパスプラザ京都(京都).

中田美絵、從辺土到中心、中古中国的信仰與社会學術研討會(首都師範大学)、2012年7月7日、北京(中国).

Nakata Mie, The creation of new Buddhism principle in Tang China and the diaspora of Central Asians during the latter half of the eighth century, The Asian Association of World Historians, 2, Seoul(Korea), 2012年4月29日.

〔図書〕(計 3 件)

中田美絵他、粟特人在中国：考古發現与出土文献的新印証、科学出版社、印刷中.

中田美絵他、日本古代中世の仏教と東アジア、関西大学出版部、2014、349(3-31)。

中田美絵他、ソグド人と東ユーラシアの文化交渉、勉誠出版、2014、276(46-60)。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

中田 美絵 (NAKATA, MIE)

関西大学・東西学術研究所・非常勤研究員

研究者番号：00582842